

## 「地図帳大好き！」な子どもを育てる

延岡市立恒富小学校 森永憲二

## はじめに

「ねえねえ、〇〇〇ってどこにあるかわかる？」  
「地名さがしの競争をしよう！」等々、社会科が始まる前の休み時間や、給食を食べ終えた後の会話である。

現在子どもたちは地図帳をいつも持ってきていて、休み時間や他の教科の時間に活用している。どこを見たらどんなことがわかるか、どのように調べたらよいかそれぞれが活用の仕方をかなりマスターしている。

地図帳を手にした4年生の4月5日から、「地図帳大好き！」になるまでの手順をふりかえってみたい。



## 1. 1学期の指導

4年生になって初めての社会科の時間。教科書や副読本を見ながら1年間の学習について話していると、必ず「地図帳はいつ使うんですか？」という質問がでる。そこで「いつ使うかわかりません。どんなときでもどの教科でも使いますので、いつも持ってきてしょう」。子どもたちは「???」といった反応である。

しかし、朝の話の中のでてくる国や、国語でできた地名などを地図でさがす活動があることでその意味がわかってくる。その時々、索引の使い方、統計資料の見方などを少しずつ指導していくのである。

## 2. 2学期の指導

地図帳を社会科の学習で本格的に使い始めるのは2学期の県の学習からである。このころになると子どもたちもかなり地図帳を使うことができている。

そこで「縮尺」や「等高線」などの見方を指導し、地図帳から地形を読み取る活動を加えるようにする。

そのことによって自然環境や土地のようすによって暮らし方が違うことに気づくようになる。また、都道府県名を書き込む作業や略地図の書き方などを随時レクリエーション的に入れていくことによりさらに地図帳を見るようになる。そしてこのことが2学期後半から3学期の社会科学習に生きてくる。

## 3. 3学期の指導

2学期後半から3学期にかけて気候による暮らしの違いや土地の高低による暮らしの違いを学習する。

ある時、長野県の王滝村を地図帳で調べていたとき、「先生！このあたりは宮崎県と違って緑色の部分（平地）がほとんどないね」「周りは高い山で囲まれているのですみみだいなね」などと、この地域の地形の特色をどんどん語り出した。



(帝国書院『小学校社会科地図帳(三訂版)』P.26)

また、岐阜県の海津町を調べていると「大きな川が流れている」「上の方の図を見ると、堤防に囲まれているのがわかるよ」などと友だち同士で話し合っているようすが見られるようになった。



(帝国書院『小学校社会科地図帳(三訂版)』P.28)

このころになると、進んで地図帳を活用し、地形や気候のようすなどを学習に生かせるようになってきた。

## おわりに

以上のように、社会科の学習の中だけでなくさまざまな学習の中で地図帳を使うことにより、「地図帳大好き！」な子どもを育てることができる。